

随 想

古代文明マヤ・アステカ遺跡をめぐる旅

佐々木 教祐

今年3月、メキシコにある古代文明の遺跡をたどる旅に出た。世界史の教科書に書かれているエジプト、メソポタミア、インダス、中国の四大文明のほかにもメソアメリカ(古代メキシコとマヤ)とアンデス(インカ)に石器の高度な文明があったことを知り、一度訪ねたいと思っていた。

本で調べてみるとメソアメリカとアンデス文明の共通点は、金属器はほとんど使わず石器を高度に発展させたこと、ピラミッドなどを築き天体観測により天文学に造詣が深かったこと、牛や馬などの大型の家畜がいなかったこと、車を使わなかったこと、近くに大河が流れていなかったことなどであろう。異なる点は、マヤ文明は、密林に都市を築き、トウモロコシを栽培し、文字をもち、20進法(手と足の指数)により数を数えたが、インカでは高地に都市を築き、山の斜面に段々畑を作り、ジャガイモなどを栽培し、文字を使わず、10進法で計算し、縄の結び目で生産量などを記録した。

両文明は共にコロンブスに始まる新大陸発見により破壊されてしまい、マヤの貴重な古文書であるイチジクの樹皮の紙に書かれた文書もキリスト教の神父らにより異端の書として徹底的に集め燃やされてしまい、現在世界に4冊しか残っていないと言われている。ただ石碑に刻まれたマヤ文字による記録の解読が進み、マヤの歴史が少しずつ明らかになってきている。

マヤ人は偉大な天文学者であり、数千年前から太陽、月、金星などの天体の運行に関して驚くべき正確な知識を持ち、1年の長さを365.242日(現在の観測では、365.2422日)と計算していたと言う。マヤには長期暦と神聖暦があり、長期暦は今から約5000年前の紀元前3114年8月13日から始まり、その一サイクルは、 $20 \times 18 \times 20 \times 20 = 14$ 万4000日が13回繰り返されると終わり、現在のサイクルの終わりは2012年12月23日と言われ、俗にマヤ世界の終焉と呼ばれているものだ。マヤの太陽暦は1カ月は20日、1年は18カ月に5日間を加えていた。神聖暦は $260 = 20 \times 13$ 日周期のカレンダーで、日本の大安、仏滅などの六輝(暦注)に似ているが非常に強い影響力があったらしい。この文明が生まれ、発展した環境に興味が湧いてくる。

成田からメヒコ航空の直行便で13時間、メキシコシティに着く。メキシコと日本の時差は-15時間。メキシコシティの高度は2000mを超えるため、15度ほど日本より南にあるのに気候は少し暖かい程度。低地にあるメリダ、カンクンは、かなり暑い。通貨はメキシコペソで、1メキシコペソ=約7円、現地の両替では1アメリカドル=10.5メキシコペソ。

2日目は、バスでパリのシャンゼリゼを真似て造られたというレフォルマ大通りを走りソカロ広場に向かう。アステカの都テノチティトランの時代から、メキシコシティの中心であり続けるソカロは、そこにいてだけで歴史の重さを感じる場所である。一辺200mを優に超える、ほぼ正方形の広々とした空間を、北にカテドラル、東に国立宮殿（大統領官邸）、南に連邦区庁舎、西にホテルのそれぞれ重厚な建物が取り囲んでいる。カテドラルは1573年起工し1813年完工した。この2世紀以上をかけた壮大な建物は、バロック、ゴシック、ルネサンス、新古典主義など、さまざまな建築様式が混ざった建物だ。アステカのケツァルコアトル神殿を征服者エルナン・コルテスが破壊し、その上に建造したものだ。歩道には数か所に小さなガラス張りがあり、地下の神殿遺跡が見られるようになっている。国立宮殿は、植民地時代にスペイン副王の居城だった建物で、現在は大統領官邸として使われている。カテドラルの裏では「テンプロマイヨール」と呼ばれるアステカ神殿遺跡の発掘が今も続いている。

次に訪れたラテンアメリカのカトリック総本山グアダルルーペ寺院は、ここもアステカ神殿跡に造られたカトリックの寺院で、褐色の肌をしたマリアさまが祀られている。「グアダルルーペの奇跡」として知られる話によると、1531年12月9日先住民ファン・ディエゴの前に褐色の肌の聖母マリアがあらわれ、聖堂を建てるように告げました。ディエゴはこのことを司祭に伝えましたが信じてもらえなかったため、再度丘を訪れました。そしてそこで聖母から与えられたバラの花束をマントに包んでもって帰り、司祭に届けると、マントに褐色のマリアが現れました。冬には咲かないバラ、マントに浮かぶマリアの絵を見た司祭は奇跡を信じ、この地に寺院を建てました。18世紀に建てられたこの古い寺院は、地盤沈下のため傾いて危険になったため、現在は隣に近代的な寺院が建てられ、原住民の深い信仰を集めている。

メキシコシティは、アステカ王国時代「テノチティトラン」と呼ばれ、テスココ湖の湖上に築かれていた都市で、1519年スペイン人のエルナン・コルテスによって征服・破壊され、湖は埋められ、その上にスペイン風の都市が築かれた。そのため地盤が弱く、特に1985年のM8.1のメキシコ地震では7000人以上が死亡し、多数の高層ビルが倒壊した。メキシコシティは人口約1900万人の大

都市であり、道路はいつも車に埋め尽くされている。その混雑解消のための工事がさらに混雑に拍車をかけていた。

次に訪れたのはメキシコ文明に最も大きな影響を与えたテオティワカンだ。メキシコシティから北東約50kmの地点に紀元前2世紀から8世紀まで栄えた巨大な宗教都市遺跡である。テオティワカン人の宇宙観、宗教観を表す極めて計画的に設計された都市で太陽のピラミッド、月のピラミッドそして南北5kmにわたる道（死者の道）が基点となり各施設が配置されている。この道の北端にある高さ42mの月のピラミッドに登るとピラミッド前の広場を囲む神殿の配置から月のピラミッドを古代人が重視していたことが実感できる。この都市で祀られた神々は、農業・文化と関係深いケツァルコアトル（羽毛の生えた蛇神で雨や水を支配する神様であると同時に農耕や宗教的な知識を教えた神様）や水神トラロックなどである。この古代都市に城壁が存在しないことから戦争のない平和な都市と考えられていたが、近年の発掘調査の結果、多数の殉教者、生け贄を捧げる風習が存在したことが判明し、戦士の壁画も発見されている。その社会についてはあまり知られていないが、規模から考えると神権的な権威が存在し、高度に階層が分化し、発達した統治組織があったと推測されている。近くに黒曜石の産地があり、職人地区も設けられ、商業と交易の中心地で農民たちの巡礼の中心地でもあったらしい。都市の面積は約20km²で、最盛期には10万～20万人が生活を営んでいたが、原因ははっきりしないが、この都市は放棄されたらしい。テオティワカンとは、「神々の都市」という意味で、後にこの地にやってきたアステカ人が命名したという。最も大きい太陽のピラミッドは65mの高さがあり、このメソアメリカでは、古いピラミッドの上にさらに新しいものを造る習慣があるが、太陽のピラミッドの下にも古い神殿が見つかっている。テオティワカンで一番高い太陽のピラミッドに登ると広大な遺跡が眼下に広がり古代人の天空との付き合い方を感じさせてくれる場所でもある。

3日目は、世界遺産であるメキシコ国立自治大学に立ち寄り、ディエゴ・リベラやシケイロスの壁画を見学した。ジャカランタの花が美しい「常夏の楽園」と呼ばれる別荘地クエルナバカで16世紀初頭につくられたカテドラルを見学、かつてメキシコの銀を支えた銀鉱山の町タコスで鉱山王ボルダが私財で建設した豪華な祭壇を備えたサンタプリスカ教会を驚きを持って眺め、美しいスペイン風の街を堪能した後、高速道路で3時間かけてメキシコシティまで帰った。スペイン時代の遺産の見学である。

4日目は、ユカタン半島の原住民が多く住む治安のよい町メリダに飛び、マヤのウシュマルとカバー遺跡を見学した。メリダからバスを使い高速道路で3時

間以上密林の中を走るが、うたた寝して目を覚ましても景色に変化はない。また密林といっても電柱程度の高さの木と灌木が生えている程度で、密林という言葉から想像する木々がうっそうと茂る森とは大違いである。その理由は根を支える土の層が10~20cmほどと薄いため大きな木が育たないらしい。最初に見学したカバー遺跡は、サクベと呼ばれる幅5mの舗装道路でウシュマルと繋がるその姉妹都市で、その数300個以上ともいわれる雨神チャックの顔で外壁全体が飾られた「仮面の神殿」が目を引き。

雨の神「チャック」は、テオティワカンなどメキシコ中央高原の主神であった「トラロック」とその属性が極めてよく似ている。ちなみに、羽毛のある蛇の神「ククルカン」もメキシコ中央高原では「ケツアルコアトル」と呼ばれており、生命と豊穡をつかさどる神と極めて酷似した属性と姿で描かれている。ユカタン半島北部は極めて雨が少なく乾燥した風土で、水源の確保が他の何にもまして重要な課題であったことを示している。

次に見学したウシュマル遺跡は、多くの建物がしっかりと残っており見ごたえのある遺跡である。メリダから南78kmに位置し、750年頃から発展し始め、スペインの侵略が始まるまでここプウク地方最大の都市として栄華を誇った。主要建造物が造られたマヤ文字の日付は、「チャーク王」の治世(在位895~907年)である。高さ38mの巨大なピラミッドは、マヤ遺跡としては珍しい小判型の石組で作られ、側壁部は丸みを帯びている。内部には4つの神殿が隠れており、小人が一夜のうちに造り上げたという伝説から、「魔法使いのピラミッド」という名がつけられている。また球技場もあり生ゴムで作った球を手を使わずに小さな石の穴に入れて争われた。ここにある大ピラミッド(高さ30m)には登頂が許可されており、頂上からは地球が丸いことを実感させるほど視界すべてが密林である。

5日目はユカタン半島最大の遺跡チチェンイツァと10年ほど前に発掘・公開された遺跡で当時のままの素晴らしい漆喰彫刻が見られるエク・バラム遺跡を見学する。メリダを出発し、密林の中の高速道路を2時間半ほど走ると遺跡に着く。チチェンイツァは700年頃から都市化が進み最盛期は900~1000年で3万5千人以上の人口が推定され、都市は少なくとも30km²の範囲に広がっていた。またメソアメリカ最多の90を超えるサクベが通り、球技場はマヤ地域最大の13を数える。屈指の国際都市であり、米国南西部産のトルコ石、メキシコ中央高地、メキシコ西部やグアテマラ高地の黒曜石製石器、グアテマラ高地産のヒスイなどが遠距離交易によって搬入されていた。大球技場(168m x 70m)の直立する壁には地上7mのところには石輪があり、ゴム球を通して競技をしたとき

れる。都市最大の神殿ピラミッドのエル・カスティーヨ(別名ククルカン・ピラミッド)は、底辺60m、高さ30mであり、4面の91段と最上段の神殿の1段を足すと計365段となり、365日暦(太陽暦)との関連を示している。北面の階段の最下段にククルカンの頭部の彫刻があり、春分・秋分の日には太陽が沈む時、ピラミッドは真西から照らされ階段の西側にククルカンの胴体(蛇が身をくねらせた姿)が現れ、ククルカンの降臨と呼ばれている。その他に天文観測所カラコルなど多くの遺跡がある。

さらにバスで1時間ほどの所にあるエク・バラム遺跡の一番の見どころはアクロポリスの中にある漆喰彫刻だ。繁栄のピークは700~900年頃でアクロポリスは高さ32mあり、都市の広さは12km²、素晴らしい漆喰彫刻は発掘そのままのもので、出土した石碑のマヤ文字も解読され、数人の統治者の名前も分かっているようだ。アクロポリスの頂上に登ると地平線まで広がるジャングルを360度見渡し、天空を愛したマヤ人に思いを馳せてみた。

6日目は、カリブ海に面したリゾート地のカンクンからバスで1時間ほどの所にある海に面するトゥルム遺跡に行く。この遺跡はカンクン市の南128kmにあり、カリブ海に臨む断崖絶壁の上に築かれ、海に面さない三方をぐるりと、厚さ6m、高さ5mの石壁で囲んでいる。13~15世紀にかけて交易港として繁栄したマヤ遺跡の一つで、都市間の抗争が激化した時代の典型的な城塞都市の造りと言える。スペイン人の侵略者グリハルバは、1518年にユカタン半島に遠征し、「セビリアにも勝るとも劣らない大きな町」や「高い塔」に驚嘆したと書き残しているそうだ。「高い塔」は、海に面して建つ高さ7.5mの基壇の上に小さな神殿をいただく神殿ピラミッドのエル・カスティーヨを指すと思われる。

マヤ遺跡を訪ねる旅で、ガイドさんに「ピラミッドから四方に広がるジャングルを見て、山みたいに見えるところはすべて遺跡です」と言われ、発掘が進んでいない現状が分かった。石器だけで高度な文明を発展させたアステカ、マヤの遺跡に心を残しながらカンクンの空港からメキシコシティを經由して成田へ帰国した。

(名古屋大学名誉教授)